英雄伝説 空の軌跡～noirl brothers FC

殲滅天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄伝説　空の軌跡～ｎｏｉｒｌ　ｂｒｏｔｈｅｒｓ　ＦＣ

【Ｎコード】
Ｎ４７４０Ｘ

【作者名】
殲滅天使

【あらすじ】
正遊撃士になるために、義兄弟のヨシュア、アルトとともに、エステルは修業の旅に出た。
今、ここに運命の輪が回り始める―。

大好きな空の軌跡に、好きなキャラを適当にぶちこめるだけぶちこんでみた（と言っても、現在はまだ二人。これから増える……かも？）作品です。矛盾点などあったら、遠慮なく教えてください。

memory zero：part1

とある家の、居間だろうか。
ツインテールの女の子が退屈そうに座っている。
「うーん……とーさん遅いなぁ。」
どうやら、父親を待っているようだ。
「今日帰るってギルドから連絡があったのにぃ……」
彼女は椅子から立ち上がると窓に駆け寄り、外を眺める。
「シェラねぇは修行で王国一周旅行してるし……あー、つまんない。ゴハンの前にもう一度棒術の練習でもしよっかな。」
その時、ドアの方から男性の声が聞こえた。
「おーい、今帰ったぞ。」
「！おとーさん！」
女の子は笑って男性のもとに駆け寄った。男性の名はカシウス・ブライトといい、女の子―エステル・ブライトの父親だ。
「ただいま、エステル。待たせちまったようだな。いい子で留守番していたか？」
「ふふん、あったりまえよ☆」
エステルは得意顔（ドヤ顔）で言った。

「とーさんの方も何もなかった？魔獣と戦ってケガしてない？」
「おお、ピンピンしてるぞ。」
と言って、ニヤリと笑うカシウス。そして。
「それよりエステル。実はお前にお土産があるんだ。」
「え、ホント！？釣りザオ？スニーカー？それとも棒術の道具とかっ？」
エステルはお土産に期待する。しかし、あまり女の子らしくないものばかりだ。
「……育て方、間違っちまったかな。お前ねぇ、女の子だったら服とかアクセサリーじゃないか？」
カシウスは呆れてため息をついた。
「キレイな服は好きだけど、すぐに汚しちゃうんだもん。アクセサリーも遊んでて壊したらヤだし。」
エステルが服やアクセサリーを欲しがらない理由はコレらしい。
……エステルが活発すぎるのがいけないのだと思うが。
「それよりとーさん。その大きな毛布、どうしたの？」
エステルは、カシウスが抱えている毛布に気づき、聞いた。
「ひょってして、それがお土産？」
「お、鋭いな……よっと……」

カシウスが毛布を捲ると……。

中から黒髪の男の子が現れた。

「……」

「……ふえっ？」

エステルは間抜けな声をあげ、

「……」

沈黙した。

カシウスはニカッと笑って

「まぁ、こういうわけだ。わりとハンサムな坊主だろ？」

と言った。こういうわけだ、と言われても……

「な、な、な、……」

エステルはしばらく『な』を連呼し、

「なんなのー、この子！？」

叫んだ。カシウスは耳をふさぐ……男の子抱えてるじゃん！！というツッコミは、なしの方向でどうぞ。

「大きな声を出すなって。起こしちまうだろうが。」

大きな声を出させたのはどいつだ！！というツッコミもなしで。

「起きちゃうって……この子、生きてるの？なんかグッタリしてるけど。」

この男の子、傷だらけだ。

「手当ては済ませたからもう命の危険はないはずだ。だが、とりあえず……休ませる必要はありそうだな。ベッドに運ぶからエステルはお湯を沸かしてくれ。」

「らじゃー！」

memory zero：part2

～カシウスの部屋～

「よく寝てる……この子、あたしと同じくらいのトシだよね。」

エステルが男の子を見ながら言った。

「こんな、真っ黒のカミ、あたし初めて見るかも。」

「確かに見事な黒髪だな。ちなみに瞳はアンバーだぞ。」

「ふーん。」

エステルは振り返り、カシウスをじっと見る。

「それはともかく……そろそろ話してもらおーか？」

そして言った。何かあるのか？

「ギクッ……」

「この子、ダレなの？なんでケガしてるの？どうしてとーさんがウチまで連れてきたの？ひょっとして隠し子？おかーさんを裏切ってたの？」

まるでマシンガンだ。

「ふう、どこでそういう言葉を仕入れてくるんだか……って。シェラザードに決まってるか。」

「うん、そー。」

エステルは得意げに言うが、エステルくらいの子供が知っていていい言葉ではないはずだ……。

「まったく、あの耳年増め……」

カシウスはシェラザードのことを嘆くと、男の子の説明をし始めた。

「この子は、父さんも仕事関係で知り合ったばかりなんだ。まだ名前も知らなかったりする。」

「仕事って、遊撃士の？」

「まあな。おっと……」

カシウスは何かに気付いたようだ。

「えっ？」

「目を醒ますぞ。」

「ん……」

男の子は目を開けた。その目を見て、エステルは驚いた。

「わ、ほんとにコハク色……」

「……ここは……」

男の子は長い沈黙の後、今いる場所について考える。

「坊主、目を醒ましたか。ここは俺の家だ。とりあえず安心していいぞ。」

カシウスが言うと、男の子は黙ってカシウスを凝視し、そして

「……どういうつもりです？」

と聞いた。

「ふえっ？」

エステルは、また間抜けな声を上げた。

「正気とは思えない……どうして……放っておいてくれなかったんだ。」

「どうしてって言われてもなぁ。いわゆる、成り行きってヤツ？」

男の子の問いかけに、カシウスが答えた。……軽すぎる。

「ふ、ふざけないで！」

男の子は叫んだ。

「カシウス・ブライト！あなたは自分が何をしてるのか……」

「こらっ！」

エステルは、突然男の子を叱った。そして、飛び蹴りを食らわせた。

「ケガ人のくせに大声出したりしないの！ケガにひびくでしょっ！」

「……」

男の子は黙って、ポカーンとエステルを見つめる。

「……だれ？」

そして聞く。エステルの存在に、今さら気付いたのだろうか。

「エステルよっ！エステル・ブライト！」

エステルは名乗った。

「俺の娘だよ。お前さんと同じぐらいの娘がいるって話しただろう？」

「そういえば……って、そんな話をしてるんじゃ！」

男の子はまた大声を出して、再び飛び蹴りを食らった。

「あたっ☆」

「おおきな声を出さないっ！」

「わ、わかったよ……でも、君の行動の方がよけいに怪我に響くんじゃ、」

「なんか言った？」

男の子はもっともなことを言ったのに、エステルは見事に無視した。そりゃあもう、見事に。

「だから怪我を悪化させる……」

「な・ん・か・言・っ・た？」

男の子は再び言うが、エステルはこれも無視。しかも笑顔で。

「何でもないです……」

男の子は諦めた。どうやら、エステルには逆らえないと悟ったようだ。

「ま、この家の中ではエステルに逆らわん方がいい。本気で怒らせたら俺も敵わんくらいだからな。」

「そうみたいですね……」

カシウスと男の子が話していると、エステルが男の子に聞く。

「ところで、あんた。なんか忘れてることない？」

「え……？」

「名前よ、名前。あたしもさっき言ったでしょ。こっちだけが知らないのってくやしいし、不公平じゃない。」

自分が勝手に名乗っただけなのに……。

「……あ……」

「まあ、道理だな。」

カシウスも言う。

「今さら隠しても仕方あるまい。不便だし、きかせてもらおうか？」

「……わかり……ました……」

男の子は名乗る。

「僕は……。……僕の名前は……」

ｍｅｍｏｒｙ？～父、旅立つ：ｐａｒｔ１（前書き）

エステル（以下エ）：はーい、こんにちは。一応主人公のエステル・ブライトでーす♪
ヨシュア（以下ヨ）：同じく、ヨシュア・ブライトです。
アルト（以下ア）：俺はエステルとヨシュアの義理の兄、早乙女じゃない、アルト・ブライトだ。マクロスＦの主人公、早乙女アルトとは一応１００％くらい関係があるから、そこ、よろしく。
エ：アルト兄さん…１００％って、カンペキに関係あるじゃん。
ア：ああ。っていうか、同一人物だな。
ヨ：まあ、それはともかく―
エ＆ａｍｐ；ア：流すなー！！
ヨ：（二人を無視して）まあ、この二人は放っておくか。さて、ようやく本編開始するわけですが―
エ：ねぇ、サブタイトルの「ｎｏｉｒｌ　ｂｒｏｔｈｅｒｓ」って、なんかヨシュアとアルト兄さんと今回拾ったあの子のこと示してるだけだけど、じゃああたしはどうなったのよ！？
ヨ：あのさあ、
ア：主人公だから、あえて言う必要もない……って、殲滅天使のやつも考えたんじゃねぇの？
ヨ：だから…
？？：クスクス、レンを呼んだみたいだけど、どうかしたのかしら？
エ＆ａｍｐ；ヨ＆ａｍｐ；ア：誰！？

＜＜あとがきに続く

memory?～父、旅立つ：part1

～朝　地方都市ロレント郊外・ブライト家～

「……う～……まぶし……」

ブライト家の長女―女子は一人しかいないが―エステルは目を覚ました。

「ふわあああっ……ん～～っ、よく寝たぁ～～っ！」

盛大な欠伸をして、そして伸びをした。

「……えっと……今朝の当番は父さんだったっけ。」

エステルは窓を開けて、外を見る。

「それじゃあ……ヨシュアとアルト兄さんはまだ……」

そう言ったその時。

ハーモニカの、聞き慣れたメロディが聞こえてきた。ベランダからだ。

「あは、ヨシュアは起きてるみたいね。アルト兄さんは……」

その時、窓から見慣れない形の紙飛行機が飛んできて部屋の中で落下した。

「アルト兄さんも起きて……って、また新しいのを開発したか。よ

ーし……あたしも早く支度しよっと！」

〜ブライト家・2階ベランダ〜

「ひゅーひゅー！」

ベランダで黒髪と琥珀色の瞳を持つ少年―ヨシュアがハーモニカを吹いていると、エステルが拍手をしながら出て来た。ちなみに、エステルの外見は栗色の髪のツインテール（止め金で止めている）、目は茶色だ。

「やるじゃない、ヨシュア。」

「ああ、さすがだな。」

そう言いながら、先ほどまで庭で紙飛行機を飛ばしていたアルトもベランダに来た。アルトというのは、2年ほど前にカシウスが遊撃士の仕事で引き取った少年で、本名は早乙女アルトという。髪はヨシュアと同じように黒いが、その長さは腰よりも長いので、いつもポニーテールにしている。目の色も黒だ。

「おはよう、エステル、アルト兄さん。ごめん。もしかして起こしちゃった？」

「ううん。ちょうど起きたところよ。」

「俺は剣の練習と飛行機作りをしてた。」

「アルト兄さんもおはよう。……そーいえば、部屋の中に紙飛行機が飛んできたわよ。」

「そんな所まで飛んだのか。大成功だな。んで、その紙飛行機は？」

「部屋に置きっぱなし。後で渡すね。……それにしても、ヨシュア

ってば朝っぱらからキザなんだから～。や～、お姉さん、思わず聞きほれちゃったわ♪」
「「……なんかオジサン（オッサン）っぽいよ（な）」」

エステルの発言に、ヨシュアとアルトはツッコミを入れた。

「まったく、何がお姉さんだか。僕と同い年のくせにさ。」
「チッチッチ、甘いわね。」

エステルは指を振りながら言った。

「同い年でも、この家ではあたしの方が先輩なんだから。言うなれば姉弟子ってやつ？…ん？そういう意味ならアルト兄さんも……」
「はいはい、よかったね。」
「俺はお前らより2歳年上の18歳だ。どうして俺が弟に……」

ヨシュアは普通にスルーし、アルトは突っ込む。

「あ～ヨシュア、なんか投げやり。アルト兄さんはちゃんとツッコミ入れてくれたのに～。」
「でも、それ、ホント良い曲だな。明るいのにどこか切なくて……ん？」

アルトは、言っている最中で何かを思い出したようだ。

（明るくて、どこか切ない、か……あいつら（シェリルとランカ）の歌、聞きてぇな。リベールに来てから2年、全然聞いてない…）

アルトが考え事をしている間も、エステルとヨシュアの会話は続く。

「うんうん。他の曲も好きだけどやっぱりその曲が一番好きかな。あれ……何て名前だっけ？」

（あいつら、今頃何してんだろうな……ランカはシェリルの実力に追い付けたのか？シェリルはまだ『銀河の妖精』とか呼ばれてそうだな。）

「『星の在り処』だよ。」

（ミシェルやルカは、何やってんだろうな……）

「そうそう、『星の在り処』。……って、アルト兄さん、どうしたの？ボーッとして。」

エステルに話しかけられて、アルトは驚いた。

「は？え？あ、……昔のこと思い出してたんだ。…ブライト家に来る前のことをな。」

「ふーん。……あっ、もしかして…？（ニヤリ）」

エステルはニヤリと笑った。

「そうだよね、アルト兄さん、性格は（一応）いいし、顔もいいし？そういう女の子の一人や二人いても……おかしくはないわよね～。」

「……（ギクッ。恐るべし、女の勘…）」

「エステル。変なこと言わないの。……アルト兄さん？どうかした？」

「おっ、お前ら、いっぺん黙れ！！」

「おっ、慌ててる慌ててる。」
「……（無言でエステルを睨む）」
「あはは、アルト兄さんが怖い……。ま、まあそれはおいといて。」
「……（ほっとしてため息をつく）」
「あたしもヨシュアくらい、ハーモニカ、うまく吹けたらいいんだけどな。」

エステルは話題を戻した。

「簡単そうに見えてこれがけっこう難しいのよね～。」
「君がやってる棒術と較べたらはるかに簡単だと思うけど……」
「ヨシュアの言う通りだな。あんな長い物、よく振り回せるよな。」
「おっ、アルト兄さんってば、立ち直り早い。」
「……うっせぇ。」
「まあまあ。要は集中力の問題だと思うよ。」
「うーん、全身を使わない作業って何だか眠くなってくるのよね～。ヨシュアも、ハーモニカもいいけどもっとアクティブに行動しなくちゃ。ヨシュアの趣味って、あとは読書と武器の手入れくらいでしょ？今時インドアばっかりじゃ女の子のハートは掴めないわよ～？」
「うっわ、インドアだな……」
「紙飛行機作りとオーブメントいじりが趣味のアルト兄さんに言われたくないよ。…悪かったね、ウケが悪くて。そういう君こそ趣味に偏りがあると思うけど。」
「釣りとか虫取りとかスポーツシューズ集めとかな。」

どこの腕白坊主？

「むぐっ……いいじゃん、好きなんだもん。」
「じゃあ、俺やヨシュアだって、好きなんだからいいだろ？」
「うっ……って言うか、虫取りなんかとっくの昔に卒業したってば。

」
「うーん、本当かなぁ？アルト兄さんが来た時だってまだしてたし……」

その時、３人の父親、カシウスが彼らを呼ぶ声が聞こえた。

「……おーい、アルト、エステル、ヨシュア。」

３人は声が聞こえた方―ベランダの下を見た。

「あ、父さん、おはよ！」
「おはよう父さん。」
「親父か、おはよう。朝めしの用意、もう出来たのか？」
「ああ、バッチリだぞ。３人とも、冷めないうちにとっとと降りてこい。」
「りょーかい！」
「分かった。」
「すぐに行くよ。」

～ブライト家・居間～

「ごちそうさま～！うーん。お腹いっぱいになっちゃった。」

朝食を終えて、エステルは言った。

「「朝からよく食べる（食う）なあ……」」

ヨシュアとアルトは同時に言った。ヨシュアは呆れ半分・驚き半

分で、アルトは１００％呆れて。

「いいじゃん。食う子と寝る子は良く育つよ♪」

「…太るぞ。」

アルトが酷いことをさらっと言った。

「ふ、太らないもん！！」

「まあ、しっかり喰ってせいぜい気合いを入れるんだな。お前たち、今日はギルドで研修の仕上げがあるんだろう？」

「うん。今までのおさらいだけどね。」

「それが終われば、あたしたちも父さんと同じ『遊撃士（ブレイサー）』よ。もう、子供扱いさせないんだから！」

「フフン、まだまだ青いな。」

カシウスは言う。というか、鼻で笑う。

「最初になれるのは《準遊撃士》。つまり見習いにすぎん。一人前になりたかったら早く《正遊撃士》になることだな。」

それを聞いたエステルは、

「むむっ、上等じゃない。」

カシウスの挑発に乗った。

「見てなさいよ～。いっぱい功績を上げまくって父さんを追い越してやるんだから！」

「はっはっは。やれるもんならやってみろ。」

カシウスはエステルをさらに煽った。ヨシュアはそれを見て、呆れてため息をつく。

「なに張り合ってんだか……」

「ほんと、似たもの父娘(おやこ)だな。エステル、油断は禁物だぞ。今日は最後に試験もあるからな。」

アルトも呆れて、ついでに試験のことを話す。エステルはおどろいたようだ。

「え、。……試験って、ナニ？」

「ま、まさか……」

「覚えてないとか……言わないよな？」

ヨシュアとアルトはジト目でエステルを見た。

「研修が身に付いてるかどうか確認するためのテストだよ。」

「合格できなかったら補習だって、シェラさんも言ってただろ。」

「！やっぱ～……カンペキに忘れてたわ……そういえばシェラ姉がそんなこと言ってた気も……」

「「「忘れてたの（（か））っ！？」」」

エステルのどアホな発言に、ヨシュア、アルトだけでなく、カシウスまでもがツッコミを入れた。

「まーでも、何とかなるって☆」

「はあ、君って子は……ノンキというか、そそっかしいというか。」

「この性格、いつになったら治るんだ？」

「ちょっとアルト兄さん、病気みたいに言わないでよ。」

「まったくもって嘆かわしい。」

「うぐっ……父さんにまで言われた。」
「この楽天的な性格はいったい誰に似たもんだろうな。」
「「父さん（親父）だよ。」」
「し、失礼ね～。父さんほどじゃないってば。」
「まったく、アルト兄さんの言う通りほんとに似たもの父娘だな。」
「それはまあいいとして。エステル、ヨシュア、そろそろ町に行くぞ。ギルドでシェラさんが待ってるからな。」

アルトは話を打ち切り、エステルとヨシュアに言った。

「ん、わかった。シェラ姉を待たせると恐いもんね。」

こうして3人は立ち上がり、家を出ようとする。エステルは途中で何かを思い出したのか、立ち止まってカシウスに聞いた。

「あ、そうだ父さん。今夜の食事当番、あたしだけど、何か食べたいものある？リクエスト、受け付けとくよ？」

思い出したのは、夕食についてだったようだ。カシウスは考え込むと、やがてこう答えた。

「ルーアン風、魚の蒸し焼きバルサミコ酢風味なんてどうだ？」
「な、何ソレ？」
「それは……エステルには無理だろ。」
「うむ、言ってみただけだ。」

カシウスはニヤリと笑う。

「いつもと同じ、魚のフライかオムレツでいいさ。無理しないで喰えるものだけ作ってくれ。」

「し、失礼なオヤジねぇ……反論できないのが悔しいけど……」

カシウスは代わりに、

「ああ、そのかわり頼みがある。雑貨屋で『リベール通信』というニュース雑誌を買ってきてくれ。今日、最新号が入荷するはずだ。」

と、頼み事をした。

「わかった。雑貨屋で『リベール通信』ね。」

カシウスはエステルに５００ミラ渡した。

「残ったら小遣いにしていいぞ。」

「太っ腹だな。」

「そうだろうそうだろう。……ただし、無駄遣いはするなよ？」

同時に釘を差すカシウス。

「やった、ありがと！」

「それじゃ、行ってきます。」

「おお、しっかりやれよ。シェラザードによろしくな。」

「ああ。」

～エリーズ街道～

「よーし、研修も試験もちゃっちゃと終わらせるわよ！」

「気合いが入ってるのはいいけど、空回りしないようにね。」

「しないって―うひゃっ！！」
「「エステル！？」」

エステル達の住むブライト家はロレントの南西にあり、エリーズ街道を西に行ったところにある。
そのエリーズ街道を歩いていると、エステルがこけた。何かにつまずいたようだ。

「痛たたた……。……って、コレ、人？男の子かな？」

エステルの足下には、少年が倒れていた。上は、袖や襟に黄色や黒、白のラインが入った青い服、下は白くて無地のスラックスと服と同じ青いショートブーツをはいている。そして、赤みの強い薄紫色のマントをつけている。髪の色はヨシュアやアルトと同じ黒で、ヨシュアより少しだけ長い。身長はエステルと同じか、エステルよりも低いかもしれない。

「…よく見たら、服ボロボロだよ。血もたくさん出たっぽいし、大丈夫かな……。ねぇ、ヨシュア。」
「……何を言いたいのか分かったけど、一応聞くよ。何？」
「この人、家に連れて行っても大丈夫かな？」
「……やっぱり……家に連れて行ってど―」
「いいんじゃね？」
「アルト兄さん……」
「ダメって言ったところでコイツが素直に聞き入れると思うか？」
「アルト兄さん、酷い！」
「確かに……分かった。その人を連れて行って、どうするか父さんに決めてもらおう。」
「ヨシュアも納得するなー！」

こうして3人はいったん家に戻ってカシウスに少年を預け、再びロレントに向けて歩き出した。

〜ロレント市〜

「やっべ……少し遅れたか？」
「いや、まだ大丈夫みたいだよ。」

アルトとヨシュアが話していると。

「うう、教会の日曜学校を卒業したばっかりなのに……遊撃士（ブレイサー）になるためにこんなに勉強させられるなんて夢にも思わなかったよ〜……」

エステルが嫌そうに言った。

「それも今日が最後じゃないか。好きで志望したんだからこのくらいは苦労して当然だよ。」
「それもそっか。……よし！最後くらい気合いを入れてシェラ姉のシゴキに耐えるぞっ！」
「おっ、気合い入ったみたいだな。じゃあ、すぐそこにある遊撃士（ブレイサー）協会（ギルド）に入るぞ。」

アルトが言うと、3人はギルドに向かった。

memory?〜父、旅立つ：part1（後書き）

レン（以下レ）：レンはね、レンっていうの。時々《殲滅天使》って呼ばれるから、出て来ちゃったわ。
ア：ああ、レンか。確かSC編までは出番ないから、その時にまた会おうな。
レ：わかったわ。それじゃあ、また会いましょ。キレイなお兄さん♪
ア：……
エ：ああ…アルト兄さんが殺気立ってる……
ヨ：うん、しばらくはそっとしておこう。…それじゃあ、ここまで―
エ：ここまで読んでくれたみんな、どうもありがとう！！感想や意見、リクエスト（！？）など、どんどん送ってね！！それじゃあ、またね！！
ヨ：エステル…君は、そんなに僕のセリフをとるのが好きなの！？

作者（以下殲）：読んでくれてありがとうございました。感想、意見、アドバイス等待ってます。
アルトの性格は『妹がいたら、こんな感じでかわいｇ…いじるのかな』という作者の妄想です。

ｍｅｍｏｒｙ?～父、旅立つ：ｐａｒｔ２（前書き）

エ：どうも～っ、エステル・ブライトでーす♪
ヨ：ヨシュア・ブライトです。
ア：アルト・ブライトだ。
殲：一応作者の殲滅天使です。
ア：おいおい、殲滅。一応とか言うなよ。
殲：ナニその略し方！？一応乙女のアタシに殲滅とか酷い！！略すなら天使にしてよ～
ヨ：君のどこが『乙女』で『天使』なんだよ…
殲：毒舌だ、ヨシュアが毒を吐き始めた！！
エ：さて、あたし達から皆さんにそれほど重大でもないお知らせがあります～す。
ヨ＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；殲：スルーしやがった！？
エ：あとがきで発表するよ☆
ヨ＆ａｍｐ；ア＆ａｍｐ；殲：えー…

memory?～父、旅立つ：part2

～遊撃士協会・ロレント支部～

「あら、おはよう。エステル、ヨシュア、アルト。」

3人がギルドに入ると、受付のアイナがあいさつする。

「アイナさんおはよう。」

「「おはようございます。」」

エステル、ヨシュア、アルトもあいさつを返す。

あいさつすると、エステルがシェラザードはもう来ているのかを聞いた。

「ええ、2階で待ってるわ。今日の研修が終われば晴れてブレイサーの仲間入りね。3人とも頑張って。」

「うん、ありがとう！」

「頑張ります。」

「ありがとうございます。」

3人は2階へ行った。

ギルドの2階では、銀髪の女性がタロット占いをしている。

「……『星』と『吊し人』……『隠者』と『魔術師』……そして逆位置の『運命の輪』……」

彼女の名はシェラザード・ハーヴェイ。彼女を知る者達は『シェラ』と呼んでいる。これまでエステル、ヨシュア、アルトをしごいてきた3人の師匠だ。

「これは難しいわね。どう読み解いたらいいのか……」

シェラザードは、タロットの結果が読めずにいるようだ。
悩んでいると、下から声が聞こえた。

「シェラ姉、おっはよー！」

エステルだった。その声の後、3人が現れた。

「あら、エステル、ヨシュア、アルト。めずらしいわね。いつもより早いじゃない。」
「えへへ、最後の研修くらいはね。とっとと終わらせてブレイサーになってやるんだから！」
「研修がよっぽどイヤだったんだな。」
「う……」
「はあ……いつも意気込みはいいんだけど。」

シェラザードはため息をついた。

「ま、その意気に応えて今日のまとめは厳しく行くからね。」
「げっ……マジかよ。」
「アルト……何か文句でも？」
「いえ、ありません！（シェラさんを怒らせると怖ぇからな……）」
「ないならよろしい。……ふふっ、覚悟しときなさい。」
「え～っ、そんなぁ……」

「お・だ・ま・り。」

アルトと同じく不平を漏らしたエステルを、シェラザードが黙らせる。

「毎回毎回、教えたことを次々と忘れてくれちゃって……そのザルみたいな脳みそからこぼれ落ちないようにするためよ。」

「ぷっ！ザル（笑）！！」

アルトが吹き出した。

「え～ん、ヨシュアぁ！シェラ姉とアルト兄さんがいぢめるよ～！」

「大丈夫ですよ、シェラさん。エステルって、勉強が嫌いで予習復習も滅多にやらないけど……ついでに無闇とお人好しで余計なお節介が大好きだけど……」

「……カンのよさはピカイチだからオーブメントも実戦で覚えます。」

途中からヨシュアの言葉を引き取ってアルトが言った。

「はぁ、こうなったらそれに期待するしかないわね……」

「ちょっとヨシュア……全然フォローしてるように聞こえないんですけどっ？」

「心外だな。君の美点を正直に言ったのに。」

「まったくもう……」

エステルはテーブルの上のタロットに目を向けた。

「あ、ところでシェラ姉。タロットで何を占ってたの？なんだか難しい顔してたけど。」

「ああ、これね。近い将来、身の回りで起きる事を漠然と占ってみたんだけど……ちょっと調子が悪いみたい。読み解くことが出来なかったわ。」
「読み解くことができない??」
「シェラさんでもそんな事ってあるんですか?」
「アルト……あたしは100%確実に当てれるわけじゃないのよ。」
「え。」
「勘違いしてたのか……。あまりに意味深な形になると逆に解釈に困ることがあるのよね。まあ、それはいいわ。最後の研修を始めるわよ。」
「「「はーい((分かりました))。」」」

「今までに習ったことを一通りおさらいするわよ。ブレイサーとして活動するのに必要な最低限の知識だからね。特にエステル。ちゃんと聞いておきなさい。」
「うぃ〜っす。……じゃあまずあたしから。オーブメントって何?」

まずエステルが質問した。

「《導力(オーブメント)機》よ。七耀石(セプチウム)を加工した結晶回路(クオーツ)が中に組み込まれていて、その機構に応じて様々な現象を引き起こすことができるわ。最初に発明されてから50年くらいしか経っていないけど……今では照明、暖房などの日用品から兵器、魔法飛行船まで、あらゆるものにオーブメントの力が利用されているのよね。ちなみに、この技術革新は一般的に《導力革命》と呼ばれているわ。……次は?」
「では、遊撃士(ブレイサー)についてお願いします。」
「分かったわ。…遊撃士というのは地域の平和と民間人の保護のた

めに働く調査と戦闘のスペシャリストよ。魔獣退治や犯罪の防止だけでなく荷物の護衛から落とし物の捜索まで様々な形で地域に貢献する仕事ね。各地の遊撃士たちを束ねているのが大陸全土に支部を持つ遊撃士協会（ブレイサーギルド）よ。……それから？」

「じゃあ俺から行きます。リベール王国について、お願いします。」

「あたしたちの住む、このリベールはゼムリア大陸の西部に位置する豊かな自然と伝統に育まれた王国よ。大陸でも有数の七耀石（セプチウム）の産地でそれを利用したオーブメントの開発でも高度な技術を誇っているわ。リベールにとってオーブメント技術は周辺の王国と渡り合いながら独立を守っていくための重要な柱ね。１０年前、エレボニア帝国に侵略された時も最後に王国を救ったのは、導力機関（オーバルエンジン）で空を駆ける飛行船を利用した作戦だったわ。まあ、帝国とは今も微妙な関係だけどアリシア女王陛下の優れた政治手腕もあって今のリベールは、おおむね平和と言えるわね。…さてと……復習はこのくらいで勘弁してあげるか。今日はやることがたくさんあるんだからとっとと実地研修に進むわよ。」

シェラザードが説明を終えると、エステルが１つの質問をした。

「ねえシェラ姉。実地研修って今までの研修と何が違うの？」

「実地っていうのは現場を体験してもらうってことよ。これから３人には遊撃士の仕事に必要なことを人通りやってもらうわ。」

「……それってつまり。机でお勉強じゃないってこと？」

「ええ、もちろん違うわよ。あちこちに出かけていって実際に体を動かしてもらうわ。たっぷり汗かいてもらうつもりだから楽しみにしてなさい。」

「えへへ、助かったわ～。」

シェラザードの言葉を聞いたエステルは、安心して笑った。

「お前にとっちゃ、勉強よりも体動かす方がずっとラクだからな。」
「うんうん、心配して損しちゃった。……って、アルト兄さん、もしかしてバカにしてる？」
「……別に？」
「何、今の間は！？」
「あはは、なんだか急に元気になったね。」
「そのテンションが最後まで続くといいんだけど……さて、と。最初の実地研修に行きましょうか。」
「おう！」

エステル、ヨシュア、アルト、シェラザードの４人はギルドの１階に戻って来た。

「最初の研修は仕事内容の確認よ。……その前に、まず３人に渡すものがあるわ。アイナ。もう用意できてる？」
「ええ、いいわよ。」
「じゃ、３人とももらってきなさい。」

３人は、アイナにブレイサー手帳をもらった。大事なものらしいから、絶対になくせない。

「それはブレイサー手帳といって、仕事の記録を残すための公式な手帳よ。どんな話を聞いたのか、どこで何を見つけたのか……些細な出来事が手掛かりになることも多いわ。細かいことでも必ず記録を残すようにね。」
「「「分かりました（はい）（げっ、ちょっと面倒かも……）。」」」

３人とも返事をするが、１人だけ返事がおかしい。シェラザードはそれを聞き逃さなかった。

「あら？気のせいかしら。返事がふたつしか聞こえなかったけど？」
「あ、あはははは……」
犯人はエステルだ。
「記録を残すことはブレイサーの大事な義務よ。面倒くさがらずしっかりやりなさい。」
「はぁ～い、分かりました。」
「ふむ、分かればよろしい。……じゃ、実際にやってもらうわよ。」
シェラザードは、説明を始める。
「出口の方を見て。掲示板があるでしょ？」
エステル達は言われた通りに掲示板を見る。
「掲示板のところまで行って仕事の内容を確認してきなさい。」
そして掲示板を確認する。見ると、

〈実地研修・宝物の回収〉
【依頼者】：シェラザード
【報酬】　：５００Ｍｉｒａ
【難易度】：直接依頼

地下水路を探索し、
宝箱に収められているものを

回収してくること。
詳しくはシェラザードまで。

とあった。

「うん、いいわね。ちゃんと確認できたみたいじゃない。掲示板のチェックはブレイサーにとって基本中の基本。緊急の仕事がないかどうか、常に確認しとくのも大事な義務よ。」
「ふう、義務ばっかりで聞いてるだけでも息苦しいわね。」
「確かに規則は多いが、それだけの責任がある仕事だからな。いい加減な気持ちじゃできねぇだろ。」

エステルはため息をつくが、アルトの言葉に納得した。

「……うん、そうだよね。もっと気合い入れていかなきゃ。」
「フフ、ちょっとは気持ちが切り替わったかしら？」
「うんっ、もうバッチリ。」

エステルは笑顔で言った。

「じゃあ、その気合いが抜けないうちにさっさと次の研修に行くわよ。」
「今度はどんな内容ですか？」
「お向かいにあるメルダースさんの工房に行って、工房の利用法について勉強するわ。わざわざ営業中に時間をとってもらってるんだから、失礼のないようにね。」
「はーい。」

ｍｅｍｏｒｙ？～父、旅立つ：ｐａｒｔ２（後書き）

エ：なんと、ＰＶアクセス数が１０００を越えました！！もうすぐ１５００！！
ヨ：すごいね。それから？
エ：それだけよ。
ア：それだけかよ！？
エ：それじゃ、次回で会おうね！！バイバイ♪
ヨ&ａｍｐ；ア&ａｍｐ；殲：無理やり終わらせた！？

memory?～父、旅立つ：part3（前書き）

エ：みんな、聞いて聞いて！なんと、
ヨ：とりあえず、まずはちゃんと挨拶しようね、エステル。
エ：はいはい♪こんにちは、エステルです。
ヨ；ヨシュアです。
ア：アルトです。
エ：いつもと変わらないメンバーか～…つまらん。
ア：つまらんって、あのなあ……。だったら親父でも呼ぶか？
カシウス（以下カ）：呼んだか？
エ：ちょっと、アルト兄さん、父さん来ちゃったじゃん……。
カ：で、エステル。大事な話があるようだが……？
エ：いつも通り、あとがきで発表！
ヨ&amp；ア&amp；カ：えー……

memory?～父、旅立つ：part3

～メルダース工房～

「ここでは工房の利用法を勉強するわ。工房では、導力魔法（オーバルアーツ）を使うための専用のオーブメントを改造したり支援用のクオーツを合成したりできるの。」

工房に着き、シェラザードが説明し始める。

「アーツには多彩な効果があるから、使いこなせるようになれば色々と便利よ。ブレイサー稼業っていうのは危険と隣り合わせの職業だから、工房とも長いお付き合いになるわ。……ま、あたしが説明できることはこれくらいね。」

そう言うと、残りの説明をメルダースに任せた。

「おう、任しとけ。…で、何を知りてぇんだ？」

「じゃあ、オーブメントについてお願い。」

「導力器（オーブメント）とは、結晶回路（クオーツ）をセットすることで色んな効果を発揮する機械のことだ。その定義からすりゃあ、照明や飛行機のエンジンなんかもみんなオーブメントなわけだが……ここで言うオーブメントは、身体能力を高め、魔法を使えるようにする《戦術オーブメント》ってやつのことだ。こいつは個人の適性に合わせて完璧に調整された1品ものだから、持ち主によって構造が異なるぜ。具体的には、属性限定のスロットや、スロットを結ぶ線（ライン）の形が違うんだが……ま、今は難しい話はよしておくとするぜ。クオーツをセットするときは、まずスロットを開封しなきゃならない。中央のスロットは開いてるが、残りは工房で開封してもらう必要がある。開封にはセピスがい

るから注意してくれ。魔法を使うのに必要なＥＰの上限は開封されたスロット数に応じて増加するからな。積極的に穴を開けていった方が利口だぜ。……次は？」

「では…アーツについてお願いします。」

「まあ、平たく言うと、専用の《戦術オーブメント》を使って発動することのできる魔法のことだ。オーブメントの中に蓄えられた《導力》と呼ばれるエネルギーで色々とおかしな現象を起こすわけだな。オーバルアーツじゃ舌噛んじまうからみんなアーツ、アーツって呼びやがる。ったく、最初（ハナ）っからそう呼べってんだ。アーツにゃ色んな種類があるんだが、使えるようにするには、まず工房で結晶（クオ）回路（ーツ）ってのを合成するんだ。そのクオーツをオーブメントのスロットにセットすると、アーツが使えるようになるってカラクリだ。使えるアーツの種類は、セットしたクオーツの属性値によって変わるぜ。水のアーツが使いたいなら水の属性値を持つクオーツをセットすればいいってわけだ。……ま、正直なところ本当はもっと複雑なんだが、差し当たりこれぐらいで十分だろ。…んで？」

「…クオーツについてお願いします。」

「クオーツってのはセピスから作られた回路のことだ。所有者の能力を引き上げると同時に様々なアーツを使用できるようにするという本当に色んな効果を持っていやがる。クオーツはオーブメントのスロットにセットして初めて効果を発揮するが……スロットによっては、セットできるクオーツの属性が限定されていることもある。新しいクオーツを合成するときは、あらかじめどこにセットするか、オーブメントを見て決めておけよ。……それから？」

「最後に、セピスについて教えて。」

「セピスってのは、魔獣が落とす七耀石（セプチウム）の欠片のことだ。色と属性に応じて地（茶）・水（青）・火（赤）・風（緑）・時（黒）・空（金）・幻（銀）って具合に7種類に分かれていやがるんだ。街ン中なら、大抵のとこでセピスは通貨のミラに換金できるんだが……工房ではこれを使って支援効果のあるクオーツを合成したり、それ

をセットするスロットを開封したりできるぜ。…もうないな？」

メルダースは3人に確認するが、質問はないようだ。

「なら、次は実際に工房を利用してもらうわよ。そのためにはまずセピスが必要ね。」

シェラザードはそう言うと、エステル達3人に各属性のセピスを渡した。

「それだけあればいくつかのクオーツを合成できるわ。まず、自分のオーブメントに合う属性のクオーツを作ってみなさい。エステル、アルトはどんな属性でもＯＫだけど、ヨシュアは時属性でないとダメよ。本当なら商店ではセピスの換金もできるんだけど、研修の都合上、今は利用できないからね。」

ここで3人のオーブメントについて説明しておこう。ちなみに、オーブメントのスロットは全部で6つで、中央のスロットの周りに5つのスロットが五角形に並んでいる。

まず、エステル。ラインの数は2本で、ライン1がスロット4つ、ライン2がスロット3つだ。属性縛りはなし。

次にヨシュア。ラインの数はエステルと同じく2本だが、ライン1のスロットが5つ、ライン2のスロットが2つで、中央と一番上のスロットが時属性限定だ。

最後にアルト。ラインの数は1本で、属性縛りもなし。つまり、かなり強力なアーツが組める。

「！！！！あ、アルト兄さん……そのオーブメント……大陸にも、数えられるほどしかいないと言われる1ラインで、しかも無属性なんて……！」

アルトのオーブメントを見たヨシュアは驚く。
ヨシュアが言った通り、１ラインのオーブメントは珍しい。そして、無属性のオーブメントも珍しい。そのため、アルトのような１ラインかつ無属性のオーブメントは、かなり珍しい。全世界で、１０人いるかどうかだ。

「１ラインで無属性！？ちょっとアルト、本当なの！？本当なら……『あのアーツ』が組めるわよ！！」

先日適性をチェックしてもらい、今日初めて自分のオーブメントを見て、アルトも驚く。

「嘘だろ！？」
「本当だ……アルト兄さん、すごい！…ところで、シェラね―」
「メルダースさん！あたしのセピス全部出すので、アルトのオーブメントのスロットを全部開封してください！！」
「「「「「えー！？」」」」」

まさかのシェラザードの言葉に、エステル、ヨシュア、アルトだけでなく、メルダースや彼の弟子のフライディも驚く。そしてシェラザードは、本当に自分のセピスを全部出した。

「ちょ、シェラさん、もったいないですって……。」
「何言ってんのよ、アルト。『アレ』が使える資質の持ち主のくせに使わない方がもったいないわよ。…メルダースさん、それで全部開けられそう？」
「あ、あぁ。アルト、オーブメントを見せてみな。」
「え、あ、はい……。」

アルトからオーブメントを受けとると、メルダースとフライディはスロットの開封を始めた。

「ねぇ、シェラ姉。『あのアーツ』って何なの？」

「あっ、俺も知りたいです。」

エステルとアルトが聞く。

「『あのアーツ』とは……。地・水・火・風の４属性を持つ最凶…いえ、最強のアーツ、『カルテット・カタストロフィ』よ！地・水・火・水以外にも、時属性が必要で、しかもそれぞれの属性値が高いから、ラインが１本でしかも属性縛りなしか、あっても１個じゃないと組めないのよ。あ、これ、レベルが上がるのよ。確かＬｖ２までかしら。効果は、１００％の確率で、耐性無視で何らかの状態異常もしくは８０％の確率で一撃死よ。ただし、消費ＥＰはすごく多いし、駆動時間もすごく長いし、発動後９０％の確率で気絶・混乱・毒状態のどれかになるってデメリットつきよ。さらにこのアーツ、他のアーツに比べてかなり長い詠唱が必要よ。」

「何そのアーツ！？すっごく不便じゃない！」

「強さの代償ね。……だからアルト、普段の戦闘でポンポン使うんじゃないわよ。」

「了解です。ところで、属性値はどうなってますか？」

アルトが属性値を聞く。これが分からなければアーツが組めない。

「Ｌｖ１は……地１、水１、火１、風１、時１よ。」

「ん？だったらヨシュア。お前でも使えるんじゃねぇか？」

「確かに、ライン１はスロットが５つあるけど…そのうち２つは時属性だから、『カルテット・カタストロフィ』に必要な属性値を満たすのは無理だよ。」

「２つ以上の属性値を持つクオーツはあるけど……。もし２人でそ

れを使って2人とも気絶したり混乱したりしたら……」
「……なら、やめておいた方がいいですね。」
「おーい、開封できたぞ。」

スロットの開封を終えて、メルダースがオーブメントをアルトに渡す。

「あ、ありがとうございます、メルダースさん、シェラさん。」
「いいのよ、これくらい。何たって、久し振りに『カルテット・アセンション』が見れるかもしれないんだから。…じゃあ、あたしの余分なクオーツもあげるから、組んでみなさい。ついでに、エステルとヨシュアのスロットも開けられるだけ開けちゃいましょ♪」
「シェラ姉……なんか、すごい太っ腹だね。」
「そりゃあね。エステルとアルトが無属性ってのは聞いてたけど、まさか1ラインとはね♪」

シェラザードは鼻歌を歌いだしそうだ。
エステル、ヨシュア、アルトはクオーツをセットした。それぞれがセットしたのは、
エステル…HP1、攻撃1
ヨシュア…行動力1、魔防1
アルト…防御1、HP1、攻撃1、魔防1、行動力1、精神1
となった。ちなみに、アルトのクオーツは防御1、HP1、攻撃1以外はシェラザードの持っていた余り物だ。

「そうそう、どのクオーツをセットするとどんなアーツが使えるようになるかは、ブレイサー手帳に載っているわ。より強力なアーツが使いたいんだったら、手帳のアーツ表やクオーツ表を見て自分なりに工夫してみるといいわ。」

エステル達がクオーツをセットしたのを確認すると、突然シェラザードのテンションが元に戻った。さっきまでのは一体何だったのだろうか。

「さて、クオーツを作ってスロットも開封したし、これで一通り工房での研修は終わりよ。次はいよいよ、お待ちかねの認定試験よ。」

「……え？し、試験って、なにそれ？」

エステルは驚く。実はコレ、演技でも現実逃避したわけでもなく、素だ。

「……お、おい…まさか、本気で忘れたのか？今朝も話したばかりだろ！？」

「あ〝……そう言えば聞いたような聞いてないような……」

それを聞いたシェラザードはため息をつく。

「はあ……ホント期待を裏切らない子ねぇ。まあいいわ。とにかく試験場に行くわよ。」

「えっ！？も、もう！？ちょ、ちょっと待ってまだ心の準備が……」

「ほらっ、きりきり歩きなさい。」

なかなか動こうとしないエステルをシェラザードは問答無用で引きずっていった。

「ヨシュア、アルト兄さん、お助け～。」

「「……」」

ヨシュアとアルトは黙って（そしてジト目で）二人を見送っていたが、２人が外に出ると、メルダースとフライディに礼を言った。

「メルダースさん、フライディさん。いろいろとありがとうございました。」
「おう、試験がんばれよ。アルト、シェラザードは説明し忘れていたが、『カルテット。カタストロフィ』には使用者によって異なる詠唱が必要だ。このメモに、詠唱の一例をまとめたから参考にしてくれ。」
「はい、ありがとうございます。（いつの間に書いたんだ……？）」
「君たち、しっかりね。」
「「はい。」」

外からエステルの叫び声が聞こえてきた。

「こら～、ヨシュア、覚えてなさいよ～！」
「何で僕だけ…？理不尽だな……」

memory?～父、旅立つ：part3（後書き）

エ：それじゃあ……発表！実は、ＰＶアクセス２０００突破＆ユニークアクセス５００突破を記念して、作者の殲滅天使が番外編を書きました！！

カ：ドンドンパフパフ～

ア：親父、そんなキャラだったのか！？

ヨ：記念とか言ってるけど……実は、現代文＆英語の授業がダルすぎて書いただけなんだよね……

殲：ヨシュアくん……ソレは言っちゃダメだって……ということで、そのうち載せます。ちなみに、封印区画最終層での話です。

カ：ネタバレしちまった！？

ア：しかもいきなりラスボスかよ！？

ｍｅｍｏｒｙ？～父、旅立つ：ｐａｒｔ４（前書き）

エ：どうも～、エステルでーすっ☆
ヨ：まさか、作者の殲滅天使が１日で２話投稿するとは思わなかったヨシュアです。
ア：じゃあ……実は昨日、酒で酔ったシェラさんに××××されてしまったアルトです。
エ＆ａｍｐ；ヨ：……（ジト目）
シェラザード（以下シェラ）：アルト…こんなところでそんなこと言って、恥ずかしいわね。
ア：だ、誰のせいですか！！（泣）
エ：はい、１人で落ち込みやがったアルト兄さんはほっといて～ｐａｒｔ４いくよ♪
シェラ：エステル、あんたをそんな言葉遣いするような子にした覚えはありません。

memory?～父、旅立つ：part4

～七耀教会　ロレント礼拝堂～

「ようやく研修の大詰めね。これから3人に認定試験を受けてもらうわ。いままでの研修の成果が発揮されることを期待しているからね。」

認定試験の会場としてシェラザードに連れてこられた場所は、礼拝堂の裏にある地下水路への入り口。

「「はい。」」

「……」

ヨシュアとアルトはきちんと返事したが、エステルは口をポカーンと開けて呆けていた。

「……？」

そしてキョロキョロするエステル。

「エステル、どうしたんだ？」

「……ねえシェラ姉。」

「なに？」

「……もしかして、試験ってペーパーテストじゃないの？」

「はあ？」

シェラザードは呆れた。

「エステル、あんたさっき掲示板を見たでしょ？」
「うん、見たけど。」
「メモまでとらせたのに覚えて　ないの？地下水路の捜索をするって書いてあったと思うんだけど。あれが最終試験よ。」
「……はああ～、良かったあ～～。」

シェラザードの言葉を聞いたエステルは、突然、空の女神（エイドス）に感謝の言葉を捧げた。

「ああ、空の女神（エイドス）さま……地下水路を作ってくださった情け深いお心に感謝を捧げます。」
「ひょっとして……筆記試験だと思ってたの？」
「それで工房であんなに騒いでたのか……」

ヨシュアとアルトは、エステルにジト目を向ける。エステルは、

「ふっ、懐かしいわね。今となってはいい思い出だわ。」

とほざいた。

「はあ、本当に僕たちちゃんと卒業できるのかな……」
「エステル、お前が卒業できないのはお前の勝手だ。だが、俺とヨシュアは巻き込むなよ。」
「な～によ2人とも、失礼しちゃうわね。」
「はいはい、3人ともお喋りはそこまで。」

いつまでも終わりそうにないお喋りをシェラザードが止める。

「試験前なんだから、もっと緊張感を持ちなさい。試験に落第したらキツイ補習を受けてもらうわよ。」

「えへへ、大丈夫だってば♪さっ、早く試験しちゃいましょ！」

エステルが自信満々に言う。その自信は、いったいどこから来るのか。

「ま、自信があるなら結果で証明してもらいましょうか。……さて、掲示板にもあった通り、試験の課題は地下水路の捜索よ。捜索対象はどこかにある宝箱の中身で、それを回収することが目的になるわ。水路の構造はすごく単純だから迷う心配はないと思うけど……本物の魔獣がうろうろしてるから、油断してると痛い目に遭うからね。……そこで、3人にはこれを渡しておくわ。」

3人は、シェラザードからティアの薬を5個と謎の手帳をもらった。

「？この手帳は？」

「それは魔獣手帳といって、戦った相手の情報を記録する手帳よ。敵の特性を見破ったらすぐその手帳に記録するといいわ。」

「なるほど……情報を制する者が戦いを制する。つまり、そういうことですね？」

「ふふ、その通りよ。よく分かってるじゃない。」

「へ～、いい物もらっちゃったわね。サンキュー、シェラ姉！」

「ありがとうございます。」

「ありがたく使わせてもらいます。」

エステル、ヨシュア、アルトはシェラザードに礼を言った。

「よーしっ、ヨシュア、アルト兄さん。気合い入れて行こっ！」

「「そうだね（な）。」」

「実戦のつもりで、慎重に行くぞ。」

～地下水路～

エステル達が地下水路を進むと、最初の分かれ道でヨシュアが止めた。

「エステル、アルト兄さん、ちょっと待って。」

そう言って、分かれ道の右側を指す。何かの装置…のようなものが置いてある。

「あそこに回復ポイントがあるから、ＨＰやＥＰが減ったら使ってみよう。」

回復ポイントとは、魔獣が多く出没する危険な場所に配置されたオーブメントの回復装置だ。

「「うん（おう）、了解！」」

ｍｅｍｏｒｙ?～父、旅立つ：ｐａｒｔ４（後書き）

エ：はい、読んでくれてありがと♪作者の殲滅天使が寂しがるから、みんな感想ｅｔｃ書いてあげてね。
殲：エステルはこんなコト言ってるけど……べ、別に、感想欲しいなんて、思ってないんだからね／／／／ごっ、誤解するんじゃないわよ！！
ア：なんつーベタなツンデレ……
ヨ：そうだ、次回はいよいよ、例の番外編載せます。空の軌跡をプレイしてない方。かなりのネタバレを含みますので、注意してください。

番外編その1～エロガッパ3人組（前書き）

エ：久しぶりに牛乳を飲んだら、ものすごい吐き気がするエステルです……おぇっ

ヨ：それ、殲滅天使の方だからね。ということで、ヨシュアです。

ア：どういう理由で『ということで』なのか分からないアルトです。

エ：そして、このちっこいのがリオンです。

リオン（以下リ）：黙れ、この能天気。

ヨ：リオン、本編じゃあんなにいい娘なのに…（嘘っぽい泣き真似）

エ：あたし達、貴女をそんな娘に育てた覚えはありません！

リ：（無言で魔神煉獄殺を出す）

ア：はい、2人消えたから、今回の話は俺が説明する。ぶっちゃけ、ネタバレだ。『空の軌跡』原作のネタバレだけじゃない、この小説のネタバレもかなり出てくる。今回読むのは、それでもいいってやつだけだぞ。それじゃ、OKなやつだけ『本文』をクリックしろ。

番外編その1～エロガッパ3人組

「よしっ、やっと最終層！」
「向こうにいるのは、リシャール大佐……じゃない！？しかも、3人いるぞ！？」

封印区画の最終層に着いたエステル達は一旦休憩をとりつつ、向こうの人物を見る。そこにいたのはリオンが言った通り、リシャールではなく、しかも何故か3人いる。1人は赤い長髪の青年、1人は銀色の短髪のこちらも青年で、残り1人はオッサンだ。

「ちょっとちょっと、オッサンの説明だけ適当じゃない！？」

向こうから謎の声が聞こえてきた。しかし、エステル達には何のことか分からない。ちなみに、今のメンバーはエステル、ヨシュア、アルト、リオン、アガット、クローゼ、シェリル、ランカの8人だ。多い、かなり多い。

「あら、赤毛のお兄さん、カッコいいじゃない。」
「……！？」

『赤毛』にアガットが反応した。確かに、アガットさんは男前でカッコいいけど、シェリルが言ったのはアガットさんじゃないんだ（泣）

そこに赤毛の青年（ｎｏｔアガット）が駆け寄る。

「おぉぉっ、シェリルちゃんじゃん。俺、大ファンなんだよねぇ～。あ、俺、ゼロス・ワイルダーな。よろしく……って、ランカちゃんもいるし～。うっわぁ、本物マジかわいいな～♪そして、そこツイ

ンテールの娘と制服の娘もかっわいーな。なんて名前？」

赤毛の青年、ゼロスはペラペラと喋り続ける。そこに、銀髪の青年とオッサンも来た。ヨシュア達男性陣は一切無視だ。

ゼロス達が女性陣に気を取られているうちに、アガット達は、

「おい、ガキども。今のうちに、あそこのゴスペルを取りに行くぞ。」

「「「誰がガキだっ（ですか）！！！」」」

と、一応小声で相談し、奥へ走って行った。

さて、エステル達は……。

「う、あ、あんたみたいな変態に教えてあげる名前なんかないんだからねっ！！い、行くわよっ！！はあーっ……――桜花無双撃！」

エステルは微妙に照れるが、遠慮なくSクラフトを食らわせる。ゼロスは、

「ぐはっ……つ、強すぎるぜ…」

と言い残し倒れた。

「「「え、エステル（さん）（ちゃん）……容赦ない（です）……」」」

クローゼ、シェリル、ランカは思わず言ってしまった。

「え、エステルって言うのか。俺は、ロニ・デュナ――」

「「「「名乗らなくていい（です）から。」」」」

「ここで名乗るのは当然のことだろ！！……ま、まあいいか。ゼロス、お前の敵、俺が取るからな！！」

銀髪の青年、ロニはＳクラフト『ファイナルプレイヤー』を使おうとするが、

「水よ、凍てつく氷の棺と化して、閉じ込めよ――ダイヤモンドダスト！」

いつから詠唱し始めたのか、クローゼが『ダイヤモンドダスト』でロニとオッサン（名前はレイヴン）、ついでにゼロスも凍らせる。

「ちょっ……オッサン、何もしてないのに……。」

「それじゃ、あたしとランカの出番ね。……天へと還る翼をあなたに――鳳翼熾天翔！」

まず、シェリルがＳクラフトで紅の翼を舞わせて３人を攻撃する。続いて、ランカもＳクラフトで。

「癒しの神よ、立ち上がりし者たちに祝福を　邪悪を退ける正義の力を与えたまえ――レディアント・ロア！」

こちらは、光で攻撃するついでに味方の体力を回復させる。

そこに、ゴスペルを取りに行ったヨシュア、アルト、リオン、アガットの４人が戻って来た。

「おい、ゴスペル取って来たぞ。」

「ついでに、縛られて転がされていたリシャール大佐も拾ってきた。」

「「「「えーーーー！？」」」」

リシャールはぶつぶつ言ってうなだれている。そんな色々と可哀想なリシャールに、エステルは告げた。

「えーっと、リシャール大佐。国家転覆を謀った罪？で貴方を逮捕します？……でいいのかな？」

「エステル…なんであちこち疑問符がつくのさ……。」

「だって、こんなの分かんないんだもん。」

「そのうち誰かが決めるだろ。２人とも、ごちゃごちゃ言ってねーで行くぞ。」

「「はーい（はい）。」」

エステル達は、リシャールを引きずって来た道を戻る。

空中回廊で他の仲間達と合流した時、アルトがこんなことを言った。

「おい……俺たち、何か忘れてないか？」

しかし、リオンが否定する。

「何も忘れてない。気のせいじゃないのか？」

「そうだな。じゃあ、戻るか。」

再び歩き始め、エレベーターの所まで戻って来た時、こんな声が聞こえてきた。

「「「この氷を溶かしてくれぇぇぇ！！」」」

それ以降、宝物庫の方から男のうなり声のようなものが聞こえてくるというメイドの訴えから、宝物庫を今まで以上に厳重に閉め、半径３００リジュの範囲内は立ち入り禁止になったらしい。

番外編その1～エロガッパ3人組（後書き）

殲：いやあ、酷い小説だった。でも、後悔も反省もしない！！それが、このアタシ・殲滅天使！！

リ：……反省くらいは、してもらうぞ（無言で義憐聖霊斬←誤字があったらごめんなさい）

殲：ちょっと待って、あなたリオンくんでしょ！？その技おかしいから！！

ア：ついに殲滅天使も食らったか……じゃあ、次回もよろしくな！！

memory?～父、旅立つ：part4．5（前書き）

エ：どうも～っ、みんなのアイドル、エステルです☆
ヨ：ブライト家唯一の常識人のヨシュアです。
エ&ア&リ&カ：どこがだっ！！
ヨ：酷いなあ、４人とも。……あれ？父さんにリオン。いつからいたの？
カ：……
リ：（´・ω・、）
ア：１人顔文字で会話し始めた！！……あ、本当の常識人、アルトです。
エ：どさくさに紛れて嘘をつかない！！
カ：人類最強、ブライト家の父のカシウスだ。
エ&ヨ&ア：……（コイツ、頭大丈夫か？）
カ：（Ｔ－Ｔ）
リ：……リオンだ。
エ：…なるほど、これが最近問題になっている『空気を読めない若者』という奴か～
リ：……！？なるほど……じゃあ……ぷ、プリンに埋もれて死ぬなら本望だっ！！！！リオンだ…
エ：おおう……
ヨ：うわ…
ア：ふーん……（ニヤリ）
カ：ほー……
殲：可愛いし萌えるから合格！！……あ、眠くてしょうがない作者の殲滅天使です。
リ：（ノ凵＞。）　。。

memory?～父、旅立つ：part4．5

～sideカシウス～

「……」

エステル達がこの坊主を連れて帰って来たため、俺は今、自分のベッドにこいつを寝かせている。全身傷だらけ（腹の傷がヤバい）ため、手当てもした。

それにしても、よく寝てるもんだ。

ヨシュアやアルトを家に引き取った時のことを思い出すな。……って、こいつもしかして。

「……グランセル支部の準遊撃士、リオン・マグナスか？」

服を替えちまったから今は分からんが、そういえば準遊撃士のエンブレムがついていたような……。クルツの下で修行してる凄腕の準遊撃士ってのは、こいつか？

「……ん……？」

考えていると、坊主が目を覚ました。

「……ここは…？……どうして…カシウス・ブライトさんが……？」

「ほう、俺の名前を知ってるのか。お前の名前は？」

「リオン……マグナス……」

おお、予想通りか。

「それでお前さん、確かグランセル支部で、クルツの下で修行していたはずだよな？どうしてロレントの、しかもこの家の近くにいたんだ？」
「……このことは…内密にお願いします。」
俺が了解すると、リオンは話を始めた。

～ｓｉｄｅリオン：３日前～

「……よし。リオン君。後は、このオーブメントをカシウスさんに送るだけだ。」
「はい。」

カシウスさんの頼みで黒いオーブメントを回収した僕とクルツ先輩はその時、発着場の飛行船公社に行くため、王都グランセルの東街区を歩いていた。深夜で周りがよく見えなかったが、周りの気配には十分に気をつけていたはずだ。

東街区を歩いていたその時、クルツ先輩が突然僕を突き飛ばした。

「！！リオン君、危ない！」
「え！？」

一瞬前まで僕がいた場所を、弾が走った。

「……つっ…」
「クルツ先輩！？」

クルツ先輩は腕を押さえていた。

「かすっただけだ…。心配はいらない。……導力銃か……どこで誰が――」

その時、いったいどこに隠れていたのか、鉤爪を装備した2人の黒装束――体格からして、男だろうか――が現れた。そのうちの1人が布でクルツ先輩の口をふさぎ、クルツ先輩はそのまま倒れた。その黒装束はクルツ先輩の懐を漁り、オーブメントを奪う。

「！おい、それを返せ！！」

僕は逃げたその黒装束を追ったが、別の黒装束に斬りつけられたので仕方なく応戦する。応戦したが、そいつはあり得ないくらい強かった。おまけに、『影縫い』という謎のクラフトを使い動きを封じてくるから、全く反撃出来なかった。

『影縫い』を食らって動けなくなり、黒装束が鉤爪を振り上げたその時。

「方術――儚きこと夢幻の如し！」

クルツ先輩が方術で槍を出した。そして、黒装束を頭から串刺しにした。そいつは倒れた。

「あの、クルツ先輩……さっき、薬嗅がされてましたよね？なんでそんなに動けるんですか？」

「ああ、咄嗟に息を止めたんだ。……だが、少し吸ってしまったみたいだな。しくじった……」

「あの、クルツ先輩のせいじゃないです！！先に気づけなかった僕のミスです……ん？」

鉤爪に毒が塗ってあったのだろうか。妙な汗が出てきた。視界も歪んでいる気がする。

「リオン君？……水よ、浄化せよ――キュリア！」

クルツ先輩がキュリアを使う。

「すみません、クルツ先輩。」

「こういうのは私の仕事だから遠慮はいらないよ。さて、方術――穏やかなること……！？」

そこに、再び黒装束が現れた。

「……発着場に向かってもこいつらがいるだろうし、そもそも営業していないだろうからなあ……リオン君！動けるか！？」

クルツ先輩はしばらく考えると、僕に聞いた。

「はい、大丈夫です。」

毒を消してもらったからだいぶ楽になった。

「なら、ロレントにいるカシウスさんのところに行って、オーブメントが奪われたことを伝えてほしい。発着場が使えないから、南街区の方から行ってくれ。」

「でも……すみません、クルツ先輩！！」

僕は頭を下げ、一旦南街区に出て、そしてグリューネ門に向かった。

それから休みつつ2、3日ほど走り、エリーズ街道に入ってしばらくすると…

「……ご苦労なことだな。」

黒装束で、赤い覆面をつけた男が現れた。

「……何者だ？」

「あいにく、名乗らぬ者に名乗る名はない……リオン・マグナス。」

「！？どうして僕の名を知って――」

「それを答える必要はない――鬼炎斬！！」

男はいきなり攻撃してきた。炎を纏った渾身の一撃――すぐに避けたのに、腹を斬られた。あんな大剣を使っているのに…

「……ぅ…」

「聞いたほどではなかったな……。殺すなと言われているから、引き上げるとしよう。」

「……待……て……」

「まだ立てたのか……。だが、それで何が出来ると言うんだ？……過去に縛られて剣を振るっているようでは、私には勝てんぞ。」

「！！」

男はそんなセリフを吐くと、どこかに去って行った。

その後も僕は歩き続けた。しかし、ロレント市とブライト家への分岐点を西に少し過ぎた所で意識が途切れた――。

～ｓｉｄｅリオン：現在～

「……という訳で、あのオーブメントは奪われてしまいました。申し訳ございません……」

「そうか。奪われたなら、取り返せばいい。出来るだけ早くな。」

「え？」

僕はカシウスさんの言葉に驚いた。

「えって何だ、えって。」

「だって…僕を責めないんですか？」

「訳のわからない奴が出て来たんだ、今回は誰のせいでもない。それに、誰かを責めるヒマがあったら、この後どうするか考える方がいいだろ？」

「……はい。」

その時、玄関と思われるところのドアがノックされた。

memory?～父、旅立つ：part4．5（後書き）

エ：いつも通り、ここまで読んでくれてありがとう！！
ヨ：ありがとう。
ア：サンキュ
リ：……ヒマ人なんだな。
殲：次は、いよいよ初めての戦闘！！……の前に、ステータス載せます。次回もどうぞよろしく！！

ステータス１（前書き）

殲：こんにちは。作者の殲滅天使でございます。…今回は邪魔が入らないみたいだし――

エ：あんですって～！？……あ、ツインテールのエステルよ☆

ヨ：とうとう挨拶のネタが切れたか……早すぎでしょ。あ、漆黒のヨシュアです。

ア：ずいぶん安易だな。ポニテのアルトだ。

リ：安易って、お前に言われたくないな。……と思ったリオンだ。

カ：不良中年という名の紳士、カシウスだ。

エ：どこが紳士よ…今回は、あたし達のステータスを載せるよ～という訳で、殲滅天使～、お願い。

殲：（……ちっ）それじゃあ、ここで使われる記号について説明しますね。ＨＰとＥＰは大丈夫だと思うので省略します。

ＳＴＲ…攻撃力

ＤＥＦ…防御力

ＡＳＴ…アーツの攻撃力

ＡＤＦ…アーツに対する防御力

ＳＰＤ…素早さ

ＤＥＸ…命中率

ＡＧＬ…回避率

ＭＯＶ…移動範囲

ＲＮＧ…リーチの長さ

です。

ステータス１

エステル・ブライト

ＨＰ　ＭＡＸ１３２　ＥＰ　ＭＡＸ８０
ＳＴＲ　４２　ＤＥＦ　２０
ＡＴＳ　１８　ＡＤＦ　１５
ＳＰＤ　１０　ＤＥＸ　１６
ＡＧＬ　０４　ＭＯＶ　０４
ＲＮＧ　０２

☆クラフト
掛け声　ＣＰ２０　中円・ＳＴＲ＋２０％
大きな声で気合いを入れる。範囲内の味方のＳＴＲを２０％上昇。

☆Ｓクラフト
烈破無双撃（れっぱむそうげき）…数え切れないほどの打撃を浴びせる勢いに任せた多段攻撃。

ヨシュア・ブライト

ＨＰ　ＭＡＸ１４５　ＥＰ　ＭＡＸ８０
ＳＴＲ　４３　ＤＥＦ　１９
ＡＴＳ　２０　ＡＤＦ　１５
ＳＰＤ　１２　ＤＥＸ　１６
ＡＧＬ　０４　ＭＯＶ　０５
ＲＮＧ　０１

☆クラフト
双連撃（そうれんげき）　ＣＰ２０　攻撃・単体
双剣を振るい２度続けて斬撃を放つ。

☆Ｓクラフト
断骨剣（だんこつけん）…幻惑的な動きの中から繰り出される連撃。

アルト・ブライト

ＨＰ　ＭＡＸ１５３　ＥＰ　ＭＡＸ５００
ＳＴＲ　４５　ＤＥＦ　２１
ＡＴＳ　２２　ＡＤＦ　１６
ＳＰＤ　１２　ＤＥＸ　１８
ＡＧＬ　０５　ＭＯＶ　０４
ＲＮＧ　０１

☆クラフト
円閃牙（えんせんが）　ＣＰ２０　攻撃・単体
回転させた武器で敵を切り裂く攻撃。

☆Ｓクラフト
漸毅狼影陣（ざんこうろうえいじん）
閃く刃で敵を斬り崩す。

ステータス１（後書き）

殲：次回はいよいよ初めての戦闘です。
エ：ひゃっほー！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4740x/

英雄伝説 空の軌跡～noirl brothers FC

2011年11月20日02時15分発行